

川合いの地

小城ゆり子

第1部 雪子の章 (1) あこがれのオリンピック

越後平野は、信濃川、阿賀野川両水系の多くの川が流れる地味豊かな農作地帯である。信濃川は長野県内では千曲川と呼ばれているが、越後山脈を越えて信濃川となり、多くの支流と合流し、最後は日本海にそそぐ。中ノ口川は、この信濃川の分流である。燕市付近で信濃川と分かれ、日本海に沿って越後平野を太く長く流れ、河口の新潟市付近で再び信濃川に合流する。この川は人工の川だという説があり、上杉謙信が家来の直江兼続に作らせたとも言われ、かつては直江川とも呼ばれていたが、真偽のほどはわからない。この中ノ口川が信濃川に合流するその少し手前で、鷲ノ木大通川が合流する。これは、白根郷の鷲ノ木地区を流れているので、この名前がある。これら三つの川の合流地点、川合いの地に、中洲のような島のような土地がある。ここには長い間、橋がなく、渡し舟が行き来し、曾野木村と黒埼村大野とを結んでいた。この物語は、この川合いの地付近で起こったことである。

雪子は信濃川の土手を走る。走って、走って、願わくば陸上競技の選手になりたい。女学校では、雪子は別に陸上の選手ではなかったが、彼女は早く走りたかった。それは、人見絹枝にあこがれていたからである。

人見絹枝。あこがれのアスリート。

一九二八年（昭和三年）夏、第九回オリンピック・アムステルダム大会の幕が切って落とされた。一九〇五年（明治三十八年）日露戦争も終わり、その約十年後に起こった第一次世界大戦も一九一八年（大正七年）に終わり、第二次世界大戦勃発まで、人々はつかの間の平和を楽しんでいた。

このアムステルダム・オリンピック大会では、初めて女子の陸上競技戦が行われた。全部で四十六カ国約三〇一四人が参加、そのうち日本人選手は四十三人であったが、この中で女子は人見絹枝ただ一人であった。人見は稀有な陸上選手で、徒競走の他、走り幅跳びや槍投げでも好成績だった。そして、百メートル走では世界記録を持っていたのだが、惜しくも決勝で敗退してしまい、なんとしてもメダルのほしい彼女は、未経験の八百メートル走に出場、で、なんとそれで銀メダルを獲得する。

その頃始まったラジオの実況中継で、雪子は絹枝に声援を送っていた。オリンピックの女王・人見絹枝二十一歳、対するに、新潟市の近郊・曾野木村の村医者・小川幸造の次女・小川雪子、十六歳。特にスポーツ万能とも言えない、平凡な女学生だった。

雪子は走った。信濃川の土手を、上流から下流に向かって、走りに走った。秋。木の葉も色づき始めている。

後ろから追ってくる足音がした。

「雪子ちゃん！」

青年が走ってくる。

「あ、友三郎さん！」

いとこの小川友三郎だった。友三郎は小川の本家の三男である。

「マラソンしてんの？」

「そう」

「早いね、雪子ちゃん」

「何の、あたしなんか早くない。早いのは人見絹枝でしょ」

「ああ、絹枝はオリンピックで銀メダル取ったんだ」

「そう。あたしも絹枝みたいに強くなりたい」

走りながら、二人は会話をかわす。

「友三郎さんもマラソン、するの？」

「うん。雪子ちゃんのまねをして。雪子ちゃんは走るの、好きなんだね。ときどき、土手を走っているの、見かけるよ」

雪子は恥ずかしい。今まで、走っている姿を見られていたのだ。

二人はなおも走る。風がびゅんびゅん飛ぶ。

それから、雪子は土手を走るごとに、友三郎が来ないかと心待ちにするようになった。が、彼は姿を見せなかった。

雪子の父・幸造は、地主の小川家の次男で、医学を学び、医者として小川家から分家した。毎年、お正月に、幸造の一家はそろって本家にお年始に行く。そのとき、雪子たちも本家のいとこたちと挨拶をかわす。両家の子供たちは、いところ同士で遊ぶ。友三郎が年々、大人びて立派な青年になっていくのを雪子はまぶしげに見ていた。彼は東京の大学を出て、郷里に帰り、新潟市の市役所に勤めているのだった。

お正月が過ぎて、雪がどんと大降りに降った日の翌日だった。友三郎が、びっこをひきひき、小川医院に現われた。

「まあ、どうなさったの？ 友三郎さん」

いぶかしがる雪子に、友三郎は、恥ずかしげに頭をかきかき、説明した。

「昨日の大雪で、屋根の雪下ろしをしていたら、足がすべってけがしちゃったのさ。面目ない」

「まあ」

「で、幸造先生に診てもらいに来たってわけさ」

診察を待つ間、待合室で雪子は彼としばし語らった。

「雪子ちゃんも、この春には女学校を卒業だね」

「ええ、でも、あたし、あまりうれしくないの」

「え、どうして？」

「卒業したら、その後、どうなるのかしらね……あたしも人見絹枝みたいにオリンピックに出たいの」

「オリンピック？」

「あ、ううん、それは無理とはわかっているの。でも、あたし、絹枝のようになりたいくて」

「ふーん」

「ねえ、なぜ絹枝は、女なのに、あんなに強いなの？」

「それはわからないなあ……でも、ある人たちに言わせると、絹枝はほんとうは男なのかもしれないんだって。あの精悍な体つきは女離れしているし、まるで男のようで……オリンピックで勝つために、女のふりをしているんじゃないかって言う人もいるんだ」

「うそよ！ 絹枝は男じゃないわ！ そんなひどいこと言わないで！」雪子は泣いた。

「ごめん、ごめん、そんな、泣かないで。つまらないことを言って、ごめん。人見絹枝は雪子ちゃんにとって、あこがれの女王なんだね。ほんとにごめん」

「あたし……あたしも、絹枝のように何かできて、家庭のことだけじゃなく、何かしたいの」

「何かしたい？ 働きたい？」

「うん」

「ぼくは、女の人たちも立派に働いていると思うよ。家にいたって、やる仕事はいっぱいあるんだ。外で働くだけが人生じゃないさ」

「そうかしら……」

「雪子ちゃんとお母さんだって、主婦としてお父さんを助けて立派に働いているじゃないか。女性の仕事ももっと評価されるべきだな。でも、雪子ちゃんには他にもっとやりたいことがあるの？」

「ううん、別に、それはないけれど……」

「だったら、迷っていないで、立派な主婦になることを考えたら？ 良妻賢母は国の礎を築く人だ」

「そうだろうか？ 女は、良妻賢母になるのが一番の、立派な生き方なんだろうか？ 他に生き方はないのだろうか？ 雪子にはわからなかった。」

(2) 医は仁術なり

小川幸造は貧乏な村医者だった。彼は本家から分家してから、二度結婚した。最初の妻は、貧乏に嫌気がさして、出て行った。その後、彼は女中に子を孕ませ、彼女を本妻にした。この妻、芳子との間には九人の子供ができたが、九人のうち、五人しか育たなかった。当時は乳幼児死亡率が高く、医者の子も全員は育たなかったのだ。育った三男二女、幸造夫婦はその学費捻出に困っていた。

戦前のことだから、現在のような医療保険制度はない。村の人々は貧しく、患者もその家族もなかなか薬代や治療費が払えなかった。彼らはたいてい農家だったから、薬代・治療費として、米や野菜を持ってくる。で、医者家族は食べるのに困ったわけではないが、現金収入が少なかった。薬代はもちろん、薬種商に払わねばならない。

「武士は食わねど高楊枝」。医家は貧しくても、男の子は大学へ、女の子は女学校へやる。男の子は職業人として自立できるよう、女の子は良縁を得て嫁入りできるように。

次女の雪子は、女学校を卒業した。当時、長男・幸一は大学の理学部で、次男・健次は同じく大学の医学部で学び、一番上の長女・俊子が、師範学校を出て教員となり、弟たちの学費を稼いでいた。あと、雪子と、小学生の三男・義男である。

あたしも働きたい……と雪子は思う。だが、女学校を卒業しても、この時代の女の子は就職はせず、家で家事手伝いをして嫁入りを待つのが普通だった。雪子は姉の俊子のように学業成績がいいわけでもないし、容姿端麗ともいえず、手先が器用でもない。人見絹枝のように一人の女として脚光をあびて華々しく生きたい……と思うだけで、平凡な娘である彼女にふさわしい就職先はなかった。

「何でもいいじゃない、看護婦でも女中でも」と姉は言うが、今一つ、雪子には職業に生きる覚悟が足りなかった。

「あんたは現実を知らんのよ」と、姉は言う。「望みだけがなくて」

「でも……姉さんはどうなの？ 小学校の先生になって、働いて、兄さんたちの学費を稼いで。嫁にも行かず、それで幸せなの？」

「幸せだよ」

「へえ……」

「毎日子供たちと楽しく暮らして。自分の努力で家計も助けられて、こんな幸せはないよ。嫁に行って苦勞するなど、ごめんこうむりたいわ。一生、私はこれで幸せ」

そういう幸せもあるのかなあ……と雪子は半信半疑だ。結婚して男の人に愛される幸せを、この姉は望んでいないのだろうか？ 人見絹枝にあこがれる一方で、当時の娘らしく、雪子は結婚にもあこがれていた。

「雪子ちゃんは普通に結婚した方が幸せになれるわね。心配ないよ、幸一と健次が大学を出たら、私が今度はあんたの花嫁支度を稼いであげるから」

「……」

雪子が姉とそんな話をしていた頃、父と母とは、ある問題で困っていた。夜、お手洗いに起きたとき、診察室で両親がこっそり話し合っているのを雪子は聞いてしまう。

「本家の友三郎さんなあ……願ってもない良縁ではあるなあ……」

「ほんとにねえ。これ以上の良縁、もう今後雪子には来ないでしょうが……でも、うちの経済状態では、どうもねえ……ほんにねえ……嫁入り仕度もしてやれねえで……雪子もかわいそうで……だども、まさか裸ではやれねえし……」

「そうだなあ、分家として恥にならないような立派な嫁入り支度をしてやらねばなあ……それができぬなら、もう少しときを待って」

「せめて幸一と健次が大学を卒業してからでしたら、なんとか……」

「そうだなあ。しかし、そのときは雪子も婚期を逸しているだろうしなあ……」

「そうですが……」

「しかし、ない袖は振れぬしなあ……」

「本家の方には、あなたから、ちゃんと言ってくだせえな。雪子は事情があって、友三郎さんのお嫁にはできないと。大変申しわけねえことですが、と」

「うむ、そうだなあ」

雪子は愕然とした。

自分に縁談がある。しかも、その相手は、なんと、あのあこがれの小川友三郎さんだというのだ。それなのに、両親は、自分にことわりもなく、十分な嫁入り支度をしてやれないから、その縁談を断るというのだ。なんということだろう。家の経済状態はわからないでもないが、ひどい、ひどすぎる、と思った。友三郎さんのところに身一つで飛んでいきたい……しかし、そんな勇気のない雪子なのだった。

「医は仁術なり」

欧米でも日本でも、医師たちは、算術によらず、どこまでも仁術を貫くよう、求められていた。古代ギリシャのヒポクラテスの誓いにも、「どんな家を訪れるときも、その自由人と奴隷の相違を問わず。不正を犯すことなく、医術を行うべし」とある。

日本国内でも、古くから医師たちに高い倫理性が求められ、貝原益軒もその「養生訓」でこう述べている。「医は仁術なり。仁愛の心を本とし、人を救うを以って志とすべし。わが身の利益を専ら志すべからず。天地のうみそだて給える人をすくいたすけ、萬民の生死をつかさどる術なれば、医を民の司命という、きわめて大事の職分なり」「医は仁術なり。人を救うを以って志とすべし」。

小川幸造はこの教えに従って、村の人々を、地主や小作人の区別をせず、公平に診ていた。そして彼は、村の人々に尊敬され、敬われていたが、家計は貧しく、大変だった。もちろん、子供たちを上級学校に入れるなどとんでもない貧乏な小作人たちから見れば、それはぜいたくな悩みであったが。

(3) 秋祭り

田中鉄次郎は、雪子と小学校が一緒だった。そして、小川本家の小作人の次男である彼にとって、雪子はまぶしい、あこがれのお嬢様だった。彼は、雪子を守る騎士(ナイト)のようだった。小学校時代、彼女をいじめっ子から守っていた。

いじめっ子は、幸造家の隣家・佐川のイネだった。

「雪ちゃんとは、おらんちが、しょんべんやうんこを汲み取ってやってるんだ。ほれ、雪ちゃんのしょんべんたれ、うんこたれ」とはやす。

小便も大便も大事な肥料の元である。幸造家は農家ではないので、隣の佐川家にそれらを汲み取ってもらっていた。それが、雪子にはつらい。

「何言うてんだて、イネちゃん」鉄次郎が雪子をかばう。

「しょんべんもうんこも、百姓には必要なんだ。それに、しょんべんたれ、うんこたれは、イネちゃんもそうでねえか。誰でもみんな、しょんべんやうんこをするんだ」

「うわーい」イネたちは、道端の小さい蛇をつかまえて、雪子の背中に入れる。

「うわーい！ 蛇雪子！」

「何するんだて！」鉄次郎が雪子の背中に手を入れて、蛇を取り出し、棄てた。

「こげなことして！ お前(め)らは、雪子ちゃんにいったい何の恨みがあるんだ？」

「おらんちの爺様は、幸造様に殺されたんだ」

「お前とこの爺様は病気で、なかなか幸造様にかからなかったのではねえけ。早く診せればいいものを、けちけちして、なかなか診せねえで、病気が重くなってから、医者にも診せねえで死なしちゃんねえと、やっと診せて、もう手遅れになったんじゃねえけ。幸造様は金がねえからと患者を診てくれねえような、そんな医者じゃねえ！」

「ふん」イネは降参した。

「あんなやつらのこと、気にするんでねえよ、雪子ちゃん」鉄次郎は雪子をはげます。

農家の子供たちは、家で働かなくてもいい非農家の子供がうらやましい。農家では、子供も必要な労働力とあてにされていて、学校にはやってもらえるが、家に帰ればきつい労働が待っていた。

「おらたちだってなあ、お前(めえ)みてえに家で勉強させてもらえれば、学校の成績もお前なんかよりもよくなるんだ」と農家の子供は言う。そんなことを言われて、雪子はしょんぼりしてしまう。

「そんなこと言われたって、気にするでねえよ」と鉄次郎はやさしい。「なんも雪子ちゃんのせいでねえ」

小学校を卒業して、雪子は女学校に進学することになった。

「女学校か。いいなあ、おらも上の学校に行きてえなあ」鉄次郎はうらやましがる。「おら、雪子ちゃんとは身分違いだなあ」

鉄次郎は雪子に、ほのかな恋心を抱いていた。

女学校を卒業して、家で手伝いをして、雪子は十九歳になった。その年は豊作で、農家も喜びにわいていた。村の鎮守の秋祭りである。彼女も、晴れ着を装って、祭りに出かける。わくわくして、何かいいことがおこるんじゃないかと、期待に胸をわくわくさせて。

ところが……。

祭りに、友三郎が来ていた。それも、見知らぬ娘と一緒に、歩いていたのだ。それだけで雪子にはわかった。この人が友三郎さんのお嫁になる人なんだ……ほんとは、ほんとは私が友三郎さんのそばにいるはずだったのに。

と、「何しょぼくれてなさるんだ、雪子ちゃん」後ろで声がした。

田中鉄次郎だった。日に焼けた、太い身体の、働き者の農村青年だった。「何か、悲しいことでもあったかね？」

いつも自分を守ってくれていた鉄次郎。ふと、雪子は彼に甘えてみる気になった。

「あたし、嫁に行けねえで」

「嫁に行けねえ？ なして、また？」

「家にお金がおて。家にお金がねえばかりに」雪子は泣けてきた。友三郎のことを思う。父と母をひどい親だと思った。

「そげなこと。おらんちは小作人だけんど、雪子ちゃんちはお医者様ではねえですか。それを、なんで、金がねえなんて」

「親が嫁入り支度をしてやれねえって、勝手に縁談を断ったんで。肝心のあたしには何も言わねえで」

「そうかあ。その縁談の相手が、雪子ちゃんは、好きだったんだ」

「好きって、別に」

「いや、隠させねえでいい。おらは雪子ちゃんのこと、誰にも言わねえ」

「あたし、器量も悪いし、女学校の成績も悪かったし、できそこないで」

「えっ、できそこないって、いったい誰が？ 雪子ちゃんが？ そんなことねえよ。雪子ちゃんは、器量よしで、雪のように白い肌の新潟美人じゃねえか」

「そう？」

「そうだよ。おらは、雪子ちゃんのこと、ずうっと前から好きだった」

「えっ？」

「だども、おらは小学校で終わりだし、雪子ちゃんは女学校へ行って、おら、身分違いだってあきらめていたんだ」

「……」

「おらに土地があったらなあ。小作でのおて、自作農として耕せる土地があったらなあ。そしたら、幸造様のところへ雪子ちゃんを貰いにいく」

「……」

「だども、おらは小作人の、それも長男でのおて、次男なんだなあ」

「……」

宵宮祭りで、あたりいっぱい騒がしい。若者たちはみな、うきうきしている。今夜は無礼講なのだ。

「こっちへ来なせえ。雪子ちゃん」

鉄次郎は、雪子を、杉林の物陰に連れていく……

(4)その結果にあったもの

冬が来た。越後平野は深い雪に閉ざされる。雪は南国の人々にとっては、あこがれかもしれないが、北国の者にとっては、やっかいなしろものだった。雪かきをしなければ、道が通れない。屋根の雪下ろしをしなければ、家が雪の重みでつぶれてしまう。一家総出で雪と戦う。白い、美しい雪は、生活をおびやかす邪魔者だった。

そんな中で、よいしょと雪下ろしをしながら、まだ少女の雪子は、自分の身体の変化に気づいていなかった。だが、母親の芳子は、九人もの子供を身ごもった経験があり、また「門前の小僧、習わぬ経を読む」とあるような、医者の子であった。母は、台所で吐しゃしている娘の所へ行く。

「雪子、お前、月のものはちゃんとあるんけ？」

「えっ？」

「月のものはちゃんとあるんか聞いてんの！」

「……」

「答えられんの？ 答えられんようなことを、したんけ？」

「……」

「お前、この頃、おかしいよ。吐き気がしたり、すっぱいものを食べたがったり、食事もちゃんと摂れんらしいじゃねえか？」

「……」

「誰と遊んだん？」

「遊ぶ？」

「違うけ？ 嫁入り前の大事な身体で、誰と遊んだんけ？」

「……」

「相手は、本家の友三郎さんけ？」

「ち、ちがいます」

「そうじゃろ。本家からは友三郎さんの嫁にお前をどうかって聞いてきたこともあったけど、今はその話ものおて、友三郎さんは近々隣村の地主さんの娘御を嫁に貰われるそうじゃからね」

「……」

「すると、相手は誰じゃ？ この村の者かえ？」

「……」

「この村の者じゃね。お前は女学校を卒業してからは、ずうーとここにおいて、外へ行ったこともねえから、相手もこの村の者じゃね。相手はまさか、百姓じゃねえだろうね」

「……」

「えっ、百姓なんかね？ 百姓風情とそんなことをした？ お前、なんてことを。あたしはお前をそんなふしだらな娘に育てた覚えはねえ！」

「ふしだら？」

「そうか。百姓とあのような行為をするのは、ふしだら、と言われるのか。」

「お前、夫婦約束でもしたんかえ？ その百姓と」

「ううん」

「えっ、夫婦約束もしてねえ？ そんな、お前、お前は夫婦約束もしてねえ相手とそんなことをしたんけ？」

「ごめんなせえ……」

雪子は泣いた。泣けば親がなんとかしてくれるみたいに、ただ幼く泣き続けた。女の身体を自覚していない、まだ少女だったのだ。その少女を前に、母親はもうお手上げ状態だった。

「水に流すとか、水子にするとか、そういう手段はねえんでしょうか？」と、母親は、医者のお父さんに相談する。

「ねえこともねえが、それは、雪子の身体をめちゃめちゃにするかもしんねえぞ」父親は慎重だった。「もっといい方法はないかなあ？」

ちょうどその頃、川向こうの大野から、幸造のところに往診の依頼に来た者があった。大野は船着場でにぎあうところで、芸者町でもあった。

往診の依頼に来たのは、芸者置屋の主人だった。

「先生、うちの芸者・常盤を診てやってほしいんで。常盤はお客の受けもよく、うちの千両箱みてえな売れっ娘だったんでごぜえますが、それがひょんなことで子を孕んでしまい、水子に流すもままならず、とうとう出産のときを迎えてしまい、ですが、その子はすぐにさるお大尽に貰われていき、万々歳だったんですが、常盤が……子を思うばかりに、お客の前でも泣いてばかりで、商売にもならねえで。食事もろくに摂らず、やせ細るばかりで、これでこの娘が死んでしもうたら、わたらの損失はいかばかりか、なんとか前の常盤のように明るく、客受けする娘に戻してもれえてえんで。身体の病気か何かわからねえんですが、ここは一つ、川向こうの曾野木村の評判高い名医・小川先生にご足労願おうということになったんでごぜえます」

「わかった。幸い、今日の午後は、他に行く所もないので、久方ぶりに川向こうの花街に行ってみよう」

「へえ、ありがとうございます。うちにはきれいで客あしらいのいい娘がたんとおりますので、その中で先生のお気に召した者を」

「いや」幸造は男の言葉をさえぎった。「わしはそういうことはしない」

「さようでごぜえますか」

「だが、患者を診るのはまた、別問題だ。病人が女衞であろうと芸者であろうと、わしにとっては同じ患者だ。医者のお務めは果たす」

「へい、ありがとうございます」

「その代わりに、うちの娘を連れていく。少々仔細があつてな、娘に勉強させてやりたいんだ」

「はあ、さようでごぜえますか」

芸者置屋の主人は、不審に思ったが、追及しなかった。

「雪子、大野へ行くからお前もついて来い」と幸造は雪子に言う。

「お前様、何も雪子にあんなとこ見せなくても」と芳子は反発したが、

「いいんだ、わしに考えがある。任せとけ」と幸造は言い、雪子を連れて、迎えに来た男ともども、深い雪の中をかきわけて歩き、川の船着場に向った。

信濃川と中ノ口川、大きな川の合流地点。川合いの地。ここを渡って大野へ行くのは、雪子には初めての事だった。川面に雪が降っている。水は静かだ。しかし、川の深さは何メートルあるか、舟から落ちたら、助からないだろう。雪子は泳ぎも不得手だ。それに、冬で、川の水は冷たい。向こう岸に着く前に、心臓が止まってしまうにちがいない。

やっと無事に岸に着く。

大野は、料理屋や芸者置屋のある瀟洒な街だった。昼間なので、まだ静かだ。夕暮れになると、お客や芸者たちでにぎあうのだろう。

「こっちでござえます」

男が一軒の置屋の中へ幸造たちを連れていき、そこの納戸部屋に招き入れる。かび臭い、狭い部屋である。常盤はそこに寝かされていた。

医師親娘を見て、彼女はにっこりした。医者が来ると、聞かされていたのだ。まだ二十歳にもならぬ少女だった。

「産後のひだちが悪いのかのお。気分はどうだ？」幸造は優しく問いかける。

常盤の頬に涙が一滴、落ちた。

医師として、幸造は、彼女の身体の隅々を調べる。

「どこもなんともないのお」

なんともないと言われても、常盤はうれしげがない。

「気うつ病だな」

常盤はさめざめと泣いている。

「そんなに泣くな。父親のない子を産むのは、何も遊女や芸者とは限っておらん。女の身体は、みな、そうなる可能性を秘めておるのだ。何を隠そう、ここにいるこのわしの娘も、そうなのじゃ」

「えっ？」

「娘も孕んでおる」

「あ、あの、お嬢様も？」常盤は驚いて雪子を見る。

「そうだ、娘も、まだ嫁入り前だというに、子ができた」

「まああ……」

そばで聞いていた雪子の目にも涙があふれる。

「それは大変でございますねえ」

「そうだ。父親のない子を産むのは、何も玄人の女とは限っておらん。女の身体は子を産むようにできておるのだ」

「お嬢様」常盤は雪子の手を握る。二人は手を取りあって、泣いた。

「そうだ、常盤。望まれぬ子を産むのは、何もお前だけとは限っておらん。様々な事情はあろうが、それが女の定めなんだ。お前の子は、さるお大尽のところへ貰われていったそうだ。きっと幸せに暮らしておるだろう。お前は、その子に会えなくても、遠くからその子の幸せを祈って暮らすのだ。また新しく人生をやり直して、明るく勤めておれば、いつかお前にも幸せが来るかもしれない。お前を身請けしてくれるめずらしもの好きと出会うかもしれない。そしたら、また、子は産めるさ。お前はまだ若いのだ」

常盤は黙って聞いた。

雪子は言った。「あたし、この子を産んでみる」

「そうか、やっとその気になったか。嘆いてばかりいてもしょうがない。よかったな」幸造も喜ぶ。

「心の病は、わしには治せぬ。だが、少しは治せたかな。これから先、神仏の教えを信じて、まだ見ぬ子、これから先もまみえることの許されぬ子のために、立派に生きるのじゃ。できる範囲でいいからな」

「はい……」

名残を惜しんで、雪子と常盤とは別れた。

雪子のお腹はだんだん大きくなってきた。どこから噂がもれたのか、「幸造様んとこの雪子嬢ちゃんが身ごもられた」と秘かに人々が言いたてる。その相手がなんと田中鉄次郎らしいと、これも噂になる。

友三郎は、田中家に乗り込んで行って、鉄次郎を捕まえ、要求した。

「君、責任をとりたまえ」

「はっ？」鉄次郎はびっくりした。友三郎は雪子のお腹の子のことを言っているのか？ しかし、『責任をとる』とはどういうことか？ 身分違いの小作人の次男が、地主の分家のお嬢様と結婚できるわけがないではないか。

「だけんど、おらは小作人じゃから……」

「小作人だからどうだっていうんだ？ 君たちは、大勢してうちへ押しかけ、小作米をまけろ、まけろ、と騒いで、いざとなったら、自分は小作人だからって逃げるのか？」

鉄次郎は小作争議の急先鋒を担っていた。

「いや、そういうわけではのおて……」

「そういうわけもこういうわけもないだろ。小作争議はする、お嬢様は孕ます、だが責任はとらないってのか？ 君は、雪子さんのことを別に好きでもなかったんか？」

「いや、そういうわけじゃねえです」

「好きだったのか？」

「はあ。まあ」

「そうか、それなら今日すぐにでも、小川医院へ行って、謝罪して、結婚の申し込みをしてくるんだな」

「でも、雪子お嬢様は、とても百姓の嫁にはなれねえです」

「そうかな？ そんなことはないと思うよ。それに、君は次男だし、町へ出て働けばいいじゃないか」

「へえ」

友三郎に発破かけられて、鉄次郎はおそるおそる小川医院へ行き、雪子の父親である医師・幸造に謝罪した。

「おらは、学もねえし、百姓仕事の他は何もできねえアホですが、それでも、おらは、こちらの雪子お嬢様が好きで、好きだもんで、とんでもねえことをやらかしてしめえました。わびる言葉もごぜえませんが、申しわけねえことでした。申しわけねえです。あのう、そのう、あのう……雪子様と……結婚させてはもらえねえでしょうか？」 やっと言った。

「結婚させないとは言っておらん」幸造ははっきり言った。彼は、ずっと考えていたのだ。「君は、うちの婿養子になりなさい」

「婿養子！」

これには鉄次郎も驚いた。身分違いの者を婿養子にとっても、小川幸造家は商人ではないし……。商人なら、優秀な従業員を娘の婿にして跡を継がせるということはあったが。あのう、それは、おらは、お医者様の仕事は継げねえし、学もねえし、小学校出でござえまして……」

「いや、わしはそういうことを言っているのではない。うちには、分家するとき本家から貰った土地がある。ごつごつした岩だらけの荒地だが、ひとつ、君の力でそこを開墾してほしい。それがわが家での君の仕事だ」

「あ、ありがとうございます」

鉄次郎は涙ながらに感謝した。

母親の芳子は反対だった。

「うちの婿養子って！　なんで小作人風情を婿養子に！」

「何言うんだ、お前」

幸造は開明的な考えのリベラリストだった。

「小作人、小作人と、お前は言いたてるが、そんならお前は何だったのだ？　忘れてしまったか？　お前はわしの何だった？　もともとお前はわしの女中だったじゃねえか」

離婚して独り身でいた幸造のところで、芳子は女中として働いていた。それが『旦那様のお手がつき』子を孕み、『本妻に直して』もらったのである。

「福沢諭吉先生も、言っておられるぞ。『天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず』と。人間はみな、同じだ。お前、わからなかったら、もっと考えてみる」

幸造はインテリ、芳子は一般庶民である。彼女は、どうしたらいいか、わからなかったのだ。

(5) 絹枝の誕生

鉄次郎は勇んで家に帰った。これでおらも土地が貰える！と有頂天になっていた。

父・義助と母・みちを捕まえて、喜び勇んで報告する。

「おとつあま、おっかさま、おら、土地が貰えるで！」

「土地が貰える？ 何、それ？」

「幸造様から土地が貰えるだ。岩だらけの荒れた土地だというけど、おらが開墾するだ。これでおらももう小作人でねえ」

「幸造様からって、お前、もしかして」

「幸造様の婿養子にしてもらえるだ」

「えっ、じゃああの噂はほんとなんかえ？ 雪子お嬢様を妊娠させたって」

「うん」

「ま、お前、なんということを」

「だけんど、幸造様は認めてくれただ。おらは、雪子ちゃんと結婚できる！」

「そんな恐れ多い」

義助もみちも、恐縮してしまった。そうでなくとも、二人にとって、小作争議の先頭に立って闘う次男の鉄次郎は、危なっかしい存在だった。幸造様のお嬢様を妊娠させたなどという噂がたって、心を痛めていたのだ。だが、幸造がそれを認め、鉄次郎を婿養子に迎えてくれるというなら、親としてこんなうれしいことはない。

「ま、そうかえ。よかっただな、鉄次郎」

二人は息子を祝ってやった。

雪がとけて、農家は多忙な季節になった。鉄次郎は鼻歌まじりで田植えをする。田植えは一家総出でやるのだ。

「おら、ここの稲刈りはできねえな。秋には幸造様んとこの開墾があるで」

農作業が一段落したら、鉄次郎は雪子と仮祝言をあげることになっていた。

「ほんにのお。お前がいなくなったら、おらたちだけで稲刈りしねばな」

「なんとかがんばってくらっしえや。おっかさま」

鉄次郎と雪子は、晴れて夫婦になった。が、雪子はそれをうれしがっているわけではなかった。お腹の子のためにはしかたないと、観念していた。彼女の心の内に彼への愛情が芽生えているわけではなかった。

楽しいはずの新婚生活も、結婚ってこんなものか、と思っただけであった。そして、雪子の臨月が来る。

お産の苦しみ。痛い！ 雪子は苦しんだ。なんでこんなに苦しまなければならないのか？ なんで女だけこんな苦しみに耐えなければならないのか？ 理不尽ではないか。男は勝手にはらしているだけなのに。

「オギャー、オギャー」赤子が産まれた。女の子だった。

「雪子！」と鉄次郎が駆け寄ってくる。

「絹枝、ね、この子の名前は絹枝というの。人見絹枝の生まれ変わりなの」

「うん、いい名前だね」鉄次郎もいろいろな名前を考えていたのだが、ここでは妻を立ててやった。

オリンピックの女王、人見絹枝は肺炎で、二十四歳の若さで亡くなっていた。それを悲しんだ雪子は、娘に絹枝、と名づけたのだった。

雪子の産後のひだちは、とてもよかった。三十日をたたずに床上げした。

芳子がお宮参りのために、おくるみを作ってくれた。

そこへ、「こんばんは。おらも寄せてくださいませ」と鉄次郎の母。みちがやってきた。

「おら、孫の顔が見とうて」遠慮がちに言う。

「いいですよ。しっかり絹枝ちゃんの顔を見てやっってくださいえ」芳子が承知する。

みちは、寝ている絹枝を見て、とても幸せそうだ。

「お前さんちでは、この子が初孫かいね？」

「そうなんです。鉄次郎は次男なんだども、長男にはまだ子がおて、あと、嫁に行った娘が一人おりますが、これも子がおて」

「そうですかね」

「それにしても、ほんに絹枝ちゃんは、かわいい赤ちゃんですねえ。だども、おらは、小作人の身だで、お宮参りのときも、絹枝ちゃんをおらが抱っこしていくわけにはいきませんねえ」

「そんなことねえですよ」芳子がみちを制する。「お宮参りには、父親側のおばあちゃんが赤ちゃんを抱っこしていくのが決まりですがね。どうぞ抱いてやっってくださいえ」

「ほうですか、ありがとうございます」

出産から三十日後、雪子と鉄次郎とはともに晴れ着を着て、みちが芳子の作ったおくるみにくるまれた絹枝を抱き、芳子もともに、お宮参りに神社に出かけた。雪子が鉄次郎と結ばれた村の鎮守様である。

神主に祝詞をしてもらい、初穂料も出し、皆は幸せだった。このときは雪子も、それなりに幸福だったのだ。

「ほら、お前たち親子三人水入らずで記念写真を撮ってもらったら？」と芳子が提案し、皆は新潟の町の写真館に行った。

親子三人で一枚、写真を撮ってもらった。

「お宮参りの記念写真ですか？ いいですなあ。こういうお祝いの写真は。昨今はつらい写真ばかりで」と、写真館の主人は小さい声で言う。

戦地へ出征する若者たちの記念写真ばかりで、主人は暗い気持になっているのだった。一九三一年（昭和六年）中国で満州事変という戦争が起こっていた。町でも、村でも、戦争にとられる男たちがいて、若夫婦が国家権力によって引き裂かれる話は、当時、もう始まっていた。それは、鉄次郎にとっても、雪子にとっても、秘かに怖れていることだった。

小川幸造家の荒地は、開墾するのが難しかった。岩でゴツゴツした、水の少ない土地なのだ。鉄次郎は、朝から晩まで、必死で働いた。自分の土地がほしかった彼だ。願いかなって、一人前の自作農になれた。仕事のつらさなど、なんでもなかった。努力すればするほど、実が結ぶのだ。労働がつらくても、幸福だった。

しかし、雪子は、普通の農家の嫁のように農作業を手伝わない。赤子の世話にかまけている。家事も育児も、農家の嫁にとっては、仕事のうちに入らないのだ。鉄次郎はそれが不満だった。この家の人々は、鉄次郎の目から見ると、誰も一生懸命働いているようには見えない。幸造はともかく、息子たちも勉強ばかりして、芳子と雪子も家事と育児ばかりである。俊子も勤め先から帰ると、何もしない。この家で、一番働いているのはおれだ、と彼は不満だった。

若い夫婦の間に、隙間風が吹いていた。

また秋が来て、稲刈りの季節になった。この年は凶作で、米の収穫量が少なかった。小作人たちは生活に困っていた。

ある日、小川医院にあやしげな一人の来客があった。百姓の大助である。鉄次郎の仲間だった。

「うちの人なら、外の荒地で働いています」と、雪子はつぶねた。

そこへ「あ、大助どん！」鉄次郎が飛んでくる。

大助は、鉄次郎に小作争議の指導をしてもらいに来たのだった。鉄次郎は、彼らと、小川本家に行った。

本家の主人が、幸造に文句を言う。「お前んとこの鉄次郎が、小作の衆と一緒にあって、わしのうちにねじ込んで来たんだ」

「それは、申しわけねえ……」

「あれは、共産党だ」

「共産党？」

「そうだ。お前んとも、大変な男を婿養子にしたもんだな。気をつけないと、これから先、何がおこるかわからんぞ」

「はあ……」

「あんな共産党は、早く離縁した方がいいぞ」本家の主人は、そうすすめる。

幸造は当惑していた。彼自身は、共産党だからとてすぐに鉄次郎を追い出そうとは思わない。だが、肝心の娘・雪子が、なぜかこの頃、ゆううつそうなのだ。

(6) 野バラの死

あるとき、雪子は母に聞いてみた。「ねえ、おっかさま、おっかさまはおとつあまとの間に、何人も子供をこしらえなさせて……あの、あのときの痛みはどうなすったの？ ずっと我慢してこられたの？」

「お産の苦しみは」

「ううん、お産のではのおて、あの、あのときの痛み、苦しみは……おっかさまは、あのような苦しみにじっと耐えてなすったの？」

「そりゃあ、あたしはおとつあまが好きだったもん」

「好きだった……そう、相手を好きなら、痛くはねえん？」

「お前は、あのとき、痛いん？」

「うん」

「気持ちよくねえの？」

「あんなこと、気持ちいいん？」

「そりゃ、お前、だんだんと慣れてくれば」

「慣れれば……」

慣れればいいのか？ 相手を好きになればいいのか？ 雪子は、秋祭りのときは、夢中で何かなんだかわからなかった。夫婦になってからも、喜びはなかった。これが女であるということなのか？ 女はみんな、苦しみに耐えなければならぬのか？ 相手を好きだったら、また違うのか？ もしも相手が友三郎さんだったら、あたしも飲んでいられたのか？

大野の常盤さんは、どうしているのだろうか？ 芸者だから、身を売らねばならぬこともあるだろう。それで幸せになれるのだろうか？ いや、人のことではない。自分のことだって。これから先、あたしはどう生きていくのだろうか？ 夜ごとのあの苦しみに耐えて、何人も子供を産んで……それが、あたしの人生なのだろうか？

せつなく、悲しい雪子だった。

芳子は後悔していた。娘は友三郎が好きだったのだ。それを、勝手に縁談を断って。ちゃんと事情を説明して、嫁入り支度が不十分でも、友三郎に貰ってもらえばよかったのだ。それを、雪子の気持をきちんと確かめず、理解しようとせず、子ができたからとて、それだけで鉄次郎と結婚させた。鉄次郎は雪子を愛していたらしいが、雪子の気持の方はあいまいだったのだ。

また、春が来た。

ある日、友三郎の妻が、小川医院へやって来た。身体の具合が悪いのだという。

「病気ではないですな」幸造は、診察の結果、そう言う。「おめでたですな」

「まあ！」妻は有頂天になる。結婚してから、なかなか子宝に恵まれなかったのだ。

「これで友三郎さんも万々歳だな」幸造と芳子がそう言って喜ぶ。その傍らで、雪子は一人、悲しんでいた。

友三郎さんのお嫁さんに子ができた……。

夜。

雪子の泣き叫ぶ悲鳴がした。それで目が覚めた幸造と芳子とは、あわてて起きだして、若夫婦の部屋に駆けつけた。

雪子は、寢床に座って泣き続けていた。寝巻きもはだけて、あられもない格好である。そばに鉄次郎が怒って立っていた。

「雪子、どしたん？」母が尋ねると、雪子は、

「もう嫌！ あたしは、嫌！ こんなこと嫌！」と、泣きじゃくる。

立っていた鉄次郎は、寢床に座って、「おれがそんなに嫌か？」慥然としてつぶやく。

幸造が若い二人に言った。「わかった。鉄次郎、明日の朝、わしのところに来なさい。雪子、お前は今晚は母さんと寝なさい。さ、もう遅いから、皆、寝なさい。一晚寝てから、冷静になって考えよう」

「さ、もうお出で」芳子が雪子をかばうように肩を抱いて連れていく。

この家では、おれ一人がよそ者なんだ……と鉄次郎は知った。つらかった。彼は彼なりに雪子とその家族につくしているつもりだったのだ。

翌朝、幸造は鉄次郎に離縁を言い渡した。

「わしは、君の気持がわからぬわけではない。すべては雪子の落ち度で、君は夫として妻に当然のことを求めただけなのだ。それはわかる。しかし、このままで、君と雪子とが夫婦として生活していくことはできないだろう。ふつつかな娘で申しわけなかった。子ができたからとて、夫婦のことを十分に教えず、わがままなまま結婚させて、君にはほんとうに申しわけなかった。絹枝は、わしらの孫だ。わたたちが責任を持って立派に育てていくから、君は心配しなくていい。それから、手切れ金代わりといっちはなんだが、君の開墾した土地は、君にあげよう。わしらが持っていても、しょうがないからな。あの土地を耕作して、君の新しい人生を生きていってほしい」

「……」

鉄次郎は、一晚眠られぬ夜を過ごし、どうしたら雪子に自分を受け入れてもらえるようになるのかと悩んでいたが、義父の幸造に離婚を宣告されては、これを承諾するしかなかった。彼は、自分の身の回りの物だけ持って、小川幸造家を出ていった。

雪子も一晚眠れぬ夜を過ごし、気持が動転していた。自分も常盤のように、与えられた運命に従って、自分にできる最善の道を生きるべきではないか、これが一晚眠れずに考えた彼女の結論だったのだ。

「うちの人？ うちの人はどこへ行ったんで？」雪子が夫を探す。

幸造が答えた。「もう出て行ったよ。わしが出した」

「おとつあま！」雪子は泣き出した。

「あっ、雪子、お前は離縁したいんではなかったのか？」

「えっ、だって、だって……」

この両親は、いつも、娘の気持を確かめないで、勝手にことを運ぶきらいがあった。

「あたし、あたし……」

「雪子、お前、どこへ行く？」止めようとする父親の手を振り切って、雪子はあわてて出て行った。

雪子は走った。信濃川の土手を全速力で走った。少女の日に人見絹枝にあこがれて走ったように、ただ走った。鉄次郎を探しに？ いや、鉄次郎の家がどこにあるか、正確には彼女は知らないのだ。曾野木村のどこかではあろうが。いつか、家は信濃川の近くだと彼が言っていた。信濃川の近くといっても、どこかわからない。鉄次郎は、自分の夫はどこにいるのか？

走り続けて、転んでしまった。涙が、とめどなく頬をぬらす。鉄次郎さん……友三郎さん……どこにいるの？ あたしはいったいどうすればいいの？ 絹枝、ごめんね。あたしは、悪い母親だね。今でも友三郎さんのことを思っているなんて。それなら、なんであの秋祭りのとき、鉄次郎さんに身体を許したのだろう？ ああ、あれは、友三郎さんと一緒のあの娘さんを見て、絶望してしまって、つい……。

あたしは、いったいこれからどうすればいいのだろう？ おとつあまは、鉄次郎さんを離縁したと言っている。離縁……あたしにはもう夫はいないのか？ あたしは一人。絹枝は父なし子になってしまった。みんな、あたしが悪いのだ。あたしが友三郎さんのことなぞ考えず、あの、あのときの痛みにも我慢していたら、こんなことにはならなかったのだ。どうしよう、これからどうしたらいいのだろう？……

雪子は土手の上で転んだまま泣いていた。人は誰も通らない。

絹枝がいる。自分にはまだ絹枝がいる。あの人見絹枝の生まれ変わりのような娘がいる。絹枝のところに帰らなければ。

川の流れを見る。岸を見る。信濃川の水は、いつも豊かだ。岸辺に、白い野バラが咲いている。野バラ……。

野バラは、誰も見ないのに、静かに咲いている。あたしも、この野バラのように、ひっそりと生きよう……と雪子は思った。この野バラを絹枝に持って行ってあげよう、と、雪子は岸辺に降りて、その花を摘もうとした。バラのとげが小指にささった。あっと思う間に、雪子の下駄がつつと走る。土手は前日の雨でぬれていた。彼女は、ばしゃん、と足をすべらせた。

あ、いけない！と雪子はあわてた。絹枝！ あたしには絹枝という幼い娘がいるのだ！ ここで死ぬわけにはいかないのだ！ あっ、でも……冷たい水の中に溺れかかって、彼女は必死で生きようとした。が……。

翌朝。

信濃川の河口で、若い女性の溺死体が発見された。

第2部 絹枝の章 (1) 戦争

一九三一年（昭和六年）、小川絹枝の生まれた年、日本側が満州事変と呼ぶ戦争があり、日本は中国東北部を侵略し始めた。それから日本は、全面的に中国を侵略し、満州国というかいらい国家を作った。やがて戦争は太平洋に広がっていく。男たちは、次々と徴兵され、女たちは、父、夫、息子、兄弟たちを奪われていた。

てんてんてまり、てんてまり……。

小川医院の前で、まりつきをして遊んでいた絹枝に、一人の百姓男が近づいてきた。見たこともない、がっしりした若い百姓だ。

「絹枝ちゃん、絹枝ちゃんねえけ？」

「えっ？ おじさん、誰？」

「シーッ、大きな声を出さんで。おらは、お前の父親だ」

「えっ？」

「うん。わけがあって、おらはお前とは離れ離れになっていたが、おらはずうーっとお前のことを見守ってきたぞ。じゃが、おらも戦争に行くことになった」

「戦争？」

「そうじゃ。戦争。行きたくはねえが……しかたがねえ。おらはもう生きて帰れんかもしれん。お前にも、もう二度と会えんかもしれん。そいで、お別れの挨拶に来た」

「お別れの？」幼い絹枝は、相手の言葉を反復するのがやっとだった。だが、おぼろげながら、ことの次第はわかった。この時代、周りにいくらでもある話だったのだ。

「おじちゃん、もう行っちゃうの？」

「うん。じゃから『おじちゃん』とは呼ばんでくれ。『おとっつあま』がいい。お前におとっつあまと呼んでもらいたくて……だが、もう時間がねえ。おらは生きて帰れんかもしれんで」

「『おとっつあま』と呼べばいいん？」

「うん、いい子だ、いい子だ」

「おとっつあまあ！」

「そう、そう、お前はいい子だ。おらはどこへ行っても、お前の幸せを祈っておるぞ。それを忘れんでくれ。や、無理かな？ お前はまだ小せえし……」

「小さくねえよ。もう六つだもん」

「そうか。それなら、家の人たちの言うことをよく聞き、幸せに生きるんだぞ。おらはお前のかたときも忘れんからな」

「……」

「さ、もう行かねばならん。名残惜しいが、これでお別れだ。身体に気をつけて、元気でな。さようなら、絹枝」

絹枝は泣いてしまった。常日頃、自分には父も母もいないことをさびしく思い、じっと耐えてきたのだ。父はいた……が、今会ったばかりなのに、その父は、お別れだ、戦争に行く、と言う

。戦争って何だろう？ この時代、親子の別れはそこここにくらでもあった話ではあったが、幼い彼女にそのことの意味を理解するのは無理だった。

だが、このときの思い出は、絹枝の心に深く刻み込まれ、生涯、忘れることはなかった。

人々は、日常生活の中で、幸せをはぐくみ、不幸に耐えて生きる。世の中が平和なら、個人の努力で、いくらでも、あるいはどうにか、幸福探求ができる。それが、いったん戦争になると、個人の幸せなど一顧だにされなくなるのだ。

一九四一年（昭和十六年）十二月、太平洋戦争が始まった。村の若者たちも、次々と戦争にとられていく。赤紙一枚で、国はいくらでも兵士を招集できる。地主の小川本家とて、無事ではなかった。息子たち、長男も次男も、三男の友三郎も、戦争にとられる。

友三郎は、出征前の夜、小川幸造を訪ねてきた。

「ぼくは、雪子さんに悪いことをしてしまったようで、今まで気になっていたんです。あのとき、ぼくが鉄次郎さんをたきつけてこちらに求婚にうかがわせたんで、そんなよけいなことをしなかったら、雪子さんも死ぬことはなかったんじゃないかって、そう思えてしょうがなかったんです。ほんとにすみませんでした」

「いや、あなたに謝ってもらうことは、何もありません。悪いのは、雪子の気持を確かめずにことを運んだわしらなんです。いつもいつも親が勝手にしゃしゃり出ていた。だいたい、わしや家内が、あの子をあなたの嫁として迎えたいという本家からの申し出を、十分な嫁入り支度をさせてやれないからと、あの子の気持を確かめもせず、親の裁量で断らせてもらったのが、間違いの元だったんですな。申しわけねえです」

この幸造の言葉で、友三郎は、初めて知ったのだ。彼は雪子に思いを寄せ、彼女と結婚したいと両親に告げ、縁談を持っていってもらったのだが、断られた。それを、雪子が拒絶したのだと、長い間、悩んできたのだ。

そうか……そうだったのか……自分で雪子に彼女の意思を聞けばよかったのだ、自分で勇気を出しておれば……。友三郎と雪子とは、お互いに心引かれながら、その愛を確かめ合うこともなく、別々の人生を歩まなければならなかった。ちょっとした誤解が大きな不幸を生んだ。だが、そんなことも、戦争という大河は呑み込んでいく。

友三郎は、妻と一男一女の子供たち二人を遺し、戦地に行き、戦死した。

幸造の三人の息子たちも、例外ではありえなかった。理学部で学んで女学校の教師となっていた幸一は、将校として召集され、医学部で学んで大学病院の医師になっていた健次は、軍医にされた。三男の義男は、まだ徴兵年齢に達していなかったが、学徒動員され、遠い富山の工場で働かされていた。

曾野木村の小川家では、幸造と芳子の夫婦の他、独身の小学校教師・俊子と、孤児の絹枝、そして幸一の妻子とが身を寄せ合って生活していた。幸一は、新潟市内の女学校で教師をしていたとき、同僚の女教師・律子と知り合い、結婚した。当時としては珍しい職場結婚、恋愛結婚だった。二人の間には、長女・春子と次女・夏子とが生まれたが、幸一は子供たちの成長していく

姿も見られず、赤紙一枚で戦争に召集されてしまった。ただ、後日談であるが、幸一と健次とは、戦死はしなかった。

絹枝は、小さいとこたち、春子と夏子には姉のような存在で、事実、この三人は仲良しの姉妹のようだった。母親の律子が外で働いているので、幼子たちをみるのは老齡の芳子だけで、自然、この子たちの面倒をみるのは、絹枝の仕事になっていた。だが、高等科の生徒になった絹枝も、学徒動員され、市内の軍需工場で働かされる。

少女たちは、勉強もなく、もちろん遊ぶことも許されず、毎日、わけのわからぬ、つらい仕事をむりやりやらされる。飛行機を作っていたのだが、飛行機とは何か、それすら少女たちに知らされていなかった。だいたい子供の作る飛行機で、兵士たちは敵機爆撃に行かされていたのだ。

でも、仕事はつらくても、少女に友だちはできた。一歳年上の美少女・滝川常子。二人は一緒にお弁当を食べたりして、仲良くなった。

その常子が、お弁当を食べながら、ぽつり、と言った。「大野へ行ったら、常盤さんという芸者さんに会えるかなあ？」

「大野？ 常盤さん？ 芸者さん？」

「うん。その芸者さんが、私のほんとお母さんなんだって。あたしを産んでくれた人」

「まあ」

「そりゃ、もちろん、私は幸せよ。今のお父さん、お母さんも、一人っ子の私をかわいがってくれてる。でも、私、養女なの」

「養女？」

「うん。母親が二人いるん」

「それ、うらやましい」

「えっ？」

「だって、あたしなんか、おとつあまもおっかさまもないのよ。おっかさまは自殺したって話だし、おとつあまは離縁されてから戦争に行って、あと、わからないし……」

「へええ……」

(2) 敗戦

戦争は日本の負け戦で進んでいた。そして、戦場だけでなく、銃後の一般庶民が住んでいるところも、危険になっていた。

一九四五年（昭和二十年）三月 東京大空襲。

そして日本各地の各都市が無差別に空襲される。都市は火の海と化し、全国の都市が焦土となった。

四月には米軍は沖縄に上陸し、六月二十三日まで酷い戦闘が続き、沖縄は文字通り壊滅した。日本は、軍人、兵隊のみならず、一般庶民にも、捕虜になることを許さず、自決を要求した。人々は自ら死ぬしかなかった。

八月六日 広島に新型爆弾が落とされる。一発で都市がめっちゃめっちゃにされ、悲惨な地獄図が広がった。原子爆弾である。

新型爆弾？ 一発で都市全体が火の海と化し、壊滅する？ これまでの爆弾も怖かったが、今度はもっと怖い、悪魔のように恐ろしい爆弾だという。どんなものか、人々にはよくわからない。わからないながら、不安と恐怖が人々の心を覆いつくす。

次の新型爆弾は新潟市に落とされる！ という噂が広まった。それは、新潟市は大規模な空襲を受けていないからで、広島市と同じく新型爆弾投下予定地にされているのではないかと怖れられたのだ。事実、新潟市は米軍の原爆投下予定地であった。ただ大規模な空襲をされていないといっても、新潟港は満州への重要な港であったため、十二回も機雷投下され、多くの船が爆撃されている。また、この他にも艦載機による銃爆撃が七月十七日にもあった。

八月九日 長崎に原子爆弾が落とされる。

八月十日のことである。米軍の艦載機がどんどん新潟上空にやって来た。新潟市は空襲された。人々は逃げ惑い、炎に包まれて次々に殺されていく。あたり一面、火の海となる。無事だった曾野木村に、小川健次の妻・静子とその子・洋一を連れて、市内より逃げて来た。

「助けて！ お母様、助けてください！」静子は義母・芳子にすがる。

「うちももう燃えてしまって。それに、今日の空襲だけではなくて、後でまたもっと恐ろしい新型爆弾が落とされるんですって」

新潟市近辺で、人々は不安と恐怖から大騒ぎしている。

「どれどれ」と幸造が医療器具を携えて、家から出てくる。

「あっ、どこへいらっしゃるの？ おとつあま！」

「新潟市内だ。けが人も多いじゃろ。わしは医者だ」

「やめてください！」芳子が夫にすがりつく。

「やめてくれって、それが医者の女房の言葉か？ 死に瀕している人々がすぐそばにおるのに、医者がその人たちを助けて何とする。わしはそこへ行くぞ」

空襲から逃げて来た静子も、幸造を制する。「ほんとに、お父様、やめてください。もうお父様が行ってどうなるもんじゃありません！」

幸造は大声でどなる。「なんだ、お前も医者の女房じゃないか。お前までわしを止めるのか？

」

「おじいちゃまあ、行かないで！」絹枝も制する。

「なんだ、お前ら、愚か者めが！」大声でどなって、幸造は倒れた。

「あっ、おじいちゃまあ！」

「あなた！」

「おとうさまあ！」

皆が呼んだが、幸造は返事せず、びくともしない。脳卒中の発作だった。

翌日、新潟県知事の布告で、新潟市民に疎開命令が出された。次の新型爆弾が新潟市に落とされる！市民は市内より逃げるように、という命令である。命令のある前から人々は逃げ始めていた。道路は、荷物を担いで逃げる人々、リヤカーに荷物を積んで逃げる人々で埋まった。

曾野木では、幸造の葬式があわただしく行われた。脳卒中の発作を起こしても、他に医者もいない。もともと幸造は村でただ一人の医者であったし、近隣の新潟市内でも、医者は軍医として召集され、残っていない。手当てもできず、家族は幸造の治療もしてやれず、彼は命の終わりを迎えたのだった。

皆、それを悲しむ余裕もなく、なおも新型爆弾の恐怖に追いたてられていた。

八月十五日。

正午に恐れ多くも天皇陛下じきじきのラジオ放送があるから、皆、ラジオのところに行って、神妙に聞くように、と命じられた。

幸造亡き後の小川家にも、村の人々が多く集まり、平身低頭して、その玉音放送に耳を傾けた。

朕深く世界の大大勢と帝国の現状とに鑑み非常の措置を以って時局を收拾せむと欲し慈に 忠良なる爾臣民に告ぐ……

(中略)

然れども朕は時運の趣く所堪え難きを堪え忍び難きを忍び以って万世の為に太平を開かむと欲す……

(後略)

何のことか？陛下はいったい何をおっしゃっているのか？堪え難きを堪え、忍び難きを忍び、がんばって戦え、玉砕しろ、死ぬ、最後の一兵になってもがんばって戦え、と言っておられるのか？

いや、そうではなさそうだ……

「米英支ソ四国に対しその宣言を受諾する」とも言っておられたぞ……

負けた？負けたのか？日本は戦争に負けたのか？戦争は終わったのか？

新型爆弾つまり原爆は、新潟市に投下されなかった。

(3) 一枚の写真

田中みちが、芳子に、鉄次郎の戦死を知らせに来た。

「ほんにおお、うちじゃ、長男も次男の鉄次郎も戦死して、もう年寄りのわしらしか残ってねえんですて」みちはそう告げた。

芳子が、絹枝に告げる。

「絹枝、お前には悲しいことじゃが、お前の父親、今まで黙っておったが、お前にも父親がおって、それが今度の戦争で……戦死したとか。お前にはつらい話じゃが」

「おとつあまが？」絹枝は泣き泣き叫んだ。

「お前、知っておったんけ？ 父親のこと」

「ええ」

「そうけ」

「おとつあまは、戦争に行きなさるとき、あたしに会いに来てくれて。そのとき、たった一度だったけど」

「そうけ。一度でも会えてよかったね。お前のおとつあまには、何も悪いところはなかった。みな、おらたち、親たちが悪かったんじゃ」

親が雪子の気持を察してやらなかったばかりに、雪子は死んだ……皆は雪子が自殺したと思っていた。実際は事故死だったのだが、真相は明らかにされなかった。

絹枝は知った。父も死んだ。たった一人、残っていた父親だったのに。戦争は絹枝から父親を奪ったのだ。

そして、祖父・幸造が亡くなったことで、絹枝は庇護者を失っていたのである。

村にも新しい生活が始まっていた。占領下の日本に、米軍は『民主主義』を教える。進駐軍によって、学制も改革された。、国民学校高等科二年を終えた絹枝は、そのまま、新制中学校三年に編入された。ここまでは義務教育となったのだ。その後の彼女の進路をどうするか、芳子と俊子とは話し合う。

「百姓がいいのお。絹枝は百姓にしようて」

「ほんにこれからは百姓になるのが अच्छい ですねえ」

「それにもともと絹枝は百姓の子だし」と、二人は決めた。

絹枝は父親似で、体格もよく、力持ちで、農業にふさわしかった。畑仕事も好きで、家にあるわずかな土地にかぼちゃやさつまいもを植え、農民のまねごとをしている。この時代、農民たちは、事実上、初めてこの国の主人公となった。食料に飢えた人々は、自分たちの着物や洋服を持って、村々につめかけ、食料を分けてもらう。何ととっても、食べる物を作っている農民こそこの国の主人なのだ。食料は統制されていたので、農民たちは国に農作物を供出しなければならず、これがけっこう大変だった。もう小作争議の時代ではない。作物の多くは国に供出させられ、小作人たちはその貰った代金を地主にやったが、代金の多寡は地主の意に沿わぬこともあり、戦争直後、寄生地主制は崩壊しかかっていた。

その上、アメリカの進駐軍ががんばって農地改革を断行したため、地主はなくなり、小作農たちは自分たちの土地が持てるようになった。水呑百姓などといわれたのは、もう昔の話だった。

食べ物を作る農民にあこがれた芳子と俊子は、絹枝を農家の嫁にしようと、その話を鉄次郎の実家に持っていった。

「一つ、お願いがあるだが」

「へ、何でしょう？」

「うちの絹枝のことじゃが」

「絹枝ちゃんが、何か？」

「絹枝に百姓仕事を教えてくれんかねえ？ あの子は、もともと、こちらの子だし、力もあるし、ゆくゆくは百姓の嫁にして」

「絹枝ちゃんを百姓の嫁に？」田中みちは驚いた。「なして、また、そげなことを？」

「絹枝は体格もいいし、頑丈で減り目の見えねえ身体だから、百姓の嫁にはむいておろうに」

「だども、それは絹枝ちゃん自身の希望なんですけ？」

「いや、それは、まだ、本人に聞いてみたわけじゃねえんだども」

「絹枝ちゃんは、上の学校に行きてえんじゃねえですか？」

「それは……」

「お前様のところでは、幸一様の春子ちゃん、夏子ちゃんは、高校へやってやるんじゃねえですか？ 絹枝ちゃんだって幸造様の孫なのに、えれえ差別をなさるのお」

「……」

「そりゃあ、絹枝ちゃん自身が、高校に行かず、百姓仕事を覚えてえっていうんなら、うちで喜んで面倒をみさせてもれえますて。百姓仕事で身を立ててえってんなら。うちにとっても、絹枝ちゃんは、大事な孫。悲しいことに鉄次郎は戦死してしめえましたが、その鉄次郎が幸造様からもらって開墾した土地がありますけに、そこを絹枝ちゃんの土地にして、おらたちが婿養子を決めてあげますて。ほんにおらところは、長男も次男も戦死して、もう孫の絹枝ちゃんしかおらんのです。だもんで、もちろん、おらたちは、絹枝ちゃんにうちに来てもれえてえですて。それを、あろうことか、絹枝ちゃんがよその農家に嫁入りして苦労するなど、そんなことは、おらたち、我慢ならねえですて」

「ほうですか……」

「ええ、まあ、そちらさまから絹枝ちゃん本人の気持を聞いてくだせえ。おらたちとしては、絹枝ちゃんをお宅の他のお子たちと同じに、高校へやってもらいてえですて。お願い(ねげ)えです」みちは、はっきりと、そう言った。

俊子たちは、家族に食べさせる食料に困っていたのだ。今、医師だった幸造を失ったこの家は大家族になっていた。芳子、俊子、絹枝、義男、それに戦地から帰還して来た幸一と健次とその妻子たち。大勢の家族の食料確保が大変だった。俊子、幸一とその妻・律子、健次が働いているので、以前と違って現金には困らなかったが、この時代にはお金では食料が買えないのだった。俊子たちは、衣類を食料に換えていた。が、それも底をついてくるので、絹枝を農家で働かせて

米や野菜を貰いたかったのだ。

だが、それはいやしい考えだったかもしれないと、俊子は反省した。絹枝を高校にやろうか？ 学費は自分が稼げばいい。もともと、幸一や健次の学費を稼ぎに小学校教師をしていた自分なのだ。今度は姪の絹枝に尽くせばいい。家族のために働くのが自分の生きが이었다はずなのだ。

「絹枝ちゃん、進路、どうするね？ お前、高校に行きたいのかね？」

「はい」絹枝ははっきりと返事した。勉強したかった。戦争中は学徒動員で働かされ、ろくな教育を受けられなかった。もう戦争は終わったのだから、今度は勉強したかった。

しかし、これまで芳子や俊子に育ててもらい、この上、伯母の俊子に学費まで出してもらうのは、気が引けた。

「あたしは働きながら、定時制へ行きますて」

「定時制？ 夜学？ 女の子が？」

「いえ、夜学じゃのおて、新潟には昼間の定時制があるって聞いたんで。農家の仕事と両立するよう、授業時間が短えんでしょ。あたしは、働きながらそこへ行きますて」

絹枝は、ちゃんと自分の進路を考えていた。姪をいつまでも子供と思っていた俊子には、意外なことだったが。

中学校の卒業式。新制中学第一回の卒業式が行われた。

その後、絹枝は、田中家を訪れた。みちが自分を高校にやってくれるよう言ってくれたことは、俊子から聞いて知っていた。

「おかげさまで、あたしも無事、中学校を卒業できました。これからは、新潟の定時制高校に行きますんで、何も心配(しんぺえ)なさらねえで。あたしは、自分で歩いて生きていこうと思ひますんで」

「まあ、絹枝ちゃんは偉いんだねえ」みちは感嘆する。

「それでこそ、鉄次郎の忘れ形見だねえ」

「うちの伯母たちにいろいろ言っただいて、ありがとうございます」

「いんや、おらたちは何もできねえで。おらたちの力で絹枝ちゃんを高校にやってあげられたらよかったんだけど……」

「いえ、その節は、ご心配をおかけして、申しわけありませんでした。でも、あたしは、自分でなんとか生きていきますんで、大丈夫です」

「それは偉えことで……じゃが、絹枝ちゃん、学問は大事(でえじ)ですよ」とみちは言う。「学問さえあったら、教養とかいうもんがありさえしたら、鉄次郎も雪子お嬢様となんとかうまくやっていけたんでねえかと、おらたちはそれがはがゆうて。おらたちは貧乏な小作人で、鉄次郎を上为学校にやってやれんかった。ほんに甲斐性のねえ親で。おらたちは、そのことばかり、後悔してきたんですて……。で、絹枝ちゃんは、勉強は好きかね？」

「ええ、好きです」

「それはよかった。これからは、若(わけ)えもんたちは、学問をしていかねば。おらたち、絹枝ちゃんにうちへ来てもれえたかったんだども」

「それは、ありがてえお話ですけど……」

「うんや、うんや、絹枝ちゃんは幸造様んとこの孫。ここへ来てほしいいうんは、おらたちの勝手な希望ですけん。絹枝ちゃんが気にすることはねえんよ。ほいでも、鉄次郎が生きておったら、と、おらちはいつもそればかり思うて、そればかり悲しゅうて」

祖母・みちは、涙を浮かべて祖父を見た。「ほんなら、お前様、あれ、あの一枚っきりの写真、一枚っきりしかねえだども、あれを絹枝ちゃんにあげていいかね？」

「いいじゃろ。絹枝ちゃんは、鉄次郎のたった一人の子じゃもん」祖父もうなずく。

絹枝には、何のことかわからない。

「ちょっこし待っててちょうでえね。今、持ってくっからね」みちは、立って仏壇の前に行き、その引き出しから一枚の古い、くしゃくしゃになった写真を取り出し、絹枝に渡した。

「あっ！」産まれたばかりの小さい子を抱いて、若い父と母とがいる。

「この写真……」

「そうじゃ、この赤ん坊が絹枝ちゃん、あんただよ」

「……」

「鉄次郎にもいつときは幸せなときがあったんじゃねえ。この写真を肌身離さず持って、軍隊でもじっと大事にしといて、亡くなるときも……」

「……」

「隣村の斉藤作次さんというお方が、偶然、鉄次郎と同じ隊で、鉄次郎は亡くなるとき、その人にこの写真を家族に届けてほしい、と、遺言したそうじゃ。家族って誰のことかねえ？ 鉄次郎は誰にこの写真を遺したかったんじゃろうねえ？ じゃが、作次さんは、これを、うちに届けてくれなさった。そう、これはうちにとっても、大事な、大事な、たった一枚の写真じゃけど、これを絹枝ちゃんにあげるて。鉄次郎の形見というても、他に何もねえんで、申しわけねえけど、これで堪忍してくだせえ」

「そんな、おばあちゃま！」自然に『おばあちゃま』という言葉がでてきた。

みちはそう呼ばれてうれしくなった。

その写真は、くしゃくしゃになり、汚れてぼろぼろになっていたが、父・鉄次郎と母・雪子、それに幼い赤子・絹枝の写真だった。

涙があふれてくる。「ありがとうございます、こんな貴重な物をいただいて……一生、大事にします」

祖父母も目に涙を浮かべていた。

(4) 平和

橋が架けられた。

信濃川、中ノ口川、それに鷺の木大通川の合流する地点、川合いの地。太い流れにさえぎられて、兩岸の人々は互に行き来ができにくく、川舟で行き来するしかなかったのだが、戦後、しばらくしてここに橋が架けられた。

この大きな川の流れには、中央にけっこう広い中洲があって、島みたいになっている。信濃川の川岸からこの中洲へ、この中洲から中ノ口川の川岸へと、橋は架けられた。橋を通る人々は、この中洲で一休みする。

この中洲。あまっている土地。この頃、あまっている土地には、皆が、野菜を植えている。わずかな土地でも、人々は、争うように、一生懸命作物を作っていた。この中洲は誰のものか？川の中にあるのだから、国の土地だろう。大水のときは水没してしまうが……決して条件のよい畑地とはいえないが、地味は豊かだ。ここで絹枝は、畑を耕し、作物を作ることにした。彼女は、学校のない時間は、せっせと野菜作りにはげんだ。

彼女の作った作物は、小川家の食卓にのり、大家族のうち、外で働いている俊子と、幸一と律子、健次たちが、絹枝に現金を払った。絹枝はその金で定時制高校の学費を払い、残った分は、将来のために貯めていた。働きながら定時制に行くことを決意しても、当時、一番の仕事は農業だったのだ。

小川医院は、完全に閉められた。健次は、復員後も大学病院に勤めて、幸造の跡を継いで開業医になる意志はなかったのだ。家は、長男で高校教師の幸一が継いだ。三男の義男は、東京の大学に行った。

絹枝は、託児所の保母になろうと決めた。以前から小さい子の世話が好きだったのだ。定時制高校を出てから、彼女は保母学校へ進む。

中洲で野菜作りをしていた絹枝は、そこへやってきた旧友の滝川常子と出会った。

「やっと橋ができたのねえ！　うれしい！　私、大野のお母さんに会いに行く！」

「よかったわね、常子ちゃん」

「うちのお父さんとお母さんとは、決して常盤さんから私をもぎ取ろうとしたのではないんよ。ただ二人には子がのおて、子を身ごもって困っている芸者さんがいると聞いて、私をひきとって、自分たちの娘として育ててくれたの。常盤さんの子だから、常子、と命名してくれた。私の両親って、そういう人たちなの。私は両親にとってもかわいがってもらっているし、今の生活が嫌で常盤さんに会いたいんではないの。ただ、常盤さんの話を聞いてから、どうしても会いたくて、ちょうど橋もできたことだし、会いたくて……ねえ、わかってくれるでしょ、この気持」

「わかるっていうよりも、あたしはうらやましい。あたしには、おっかさまもおとっつあまもいねえもん」

「あ、ごめんなさい、絹枝ちゃん、私、自分のことだけで浮かれてしまって」

「ううん、いいのよ。常子ちゃん、親のいる人は幸せね。その幸せを大事にしなくちゃ。早く常盤さんのところに行ってあげて」

絹枝の瞳に涙が滲む。幸せいっぱいの子は、そこを離れて、端を渡って大野へ行った。

その後はどうなったか？

数日後、また川の中洲で、絹枝は常子と再会した。常子は幸福の絶頂にいた。

「会えたの？ お母さんに、会えたのね」

「うん、お母さんはもうとうに大野にはいなくて、新潟市内の呉服屋さんのおかみさんになってた。大金で身請けしてもらったんだって。今は、私の弟も妹もいて、とっても幸せそうだった。常盤お母さんのように、自分に与えられた場所で、まっとうに生きていれば、いつか幸せになれるのね」

「まあ、よかったわねえ！」

友の幸せを祝ってあげながら、絹枝は悲しかった。自分の父母はもうこの世にいない。母代わりの伯母・俊子にも今一つ甘えられず、幼いときにたった一回会ったきりの父は、戦死した。大勢の家族の中で、絹枝は、一人、孤独だった。

三つの川の合流地点で、彼女は祈る。この三つの川のように、父と、母と、自分とが、合い会うときがいつか来るように。夢のような話だが、ときはまだ戦後間近。仲を引き裂かれた家族が再会する話は、日本国中にいっぱいあった。

日本は戦争に負けてしまったが、人々は未来に希望が持てた。米軍のやった農地改革で、小作農たちは自分の土地が持てて、人々は自らの幸福を追求することができた。旧地主たちは没落したが、若者たちはめいめいの道に進んだ。

信濃川。川の水は泥臭く、土色で、決して青く美しい川ではなかったが、平和で、豊かな実りをもたらす。冬は雪が積もって、畑仕事はできなかったが、やがて待ち遠しい越後平野の春がやってくる。絹枝は中洲で畑仕事にはげんでいた。

ある日の午後、学校が終わって、中洲でせっせと菜を収穫していた絹枝は、ふと、背後に人の気配を感じた。見ると、すぐ後ろで、若いお坊さんが絵を描いていた。僧侶の服を着て、頭もぐりぐり坊主の、小柄な青年だった。

「あ、ごめん、ぼく、ここで絵を描いていていいかな？」と青年が言う。「ぼく、大野の厚福寺の住職。三枝寿輔っていうんだ」

橋ができたので、大野の青年も、自由に来ることができるようになったのだ。

「ぼく、まだ若くて、ほんとうならまだ住職にはなれねえんだが、僧侶だった父親が戦死したので、今は代わりにぼくが住職をしているんだ。ぼく、葬式も法事もない日には、絵を描いているんだ」

「絵描きさんをしているの？」

見ると、青年は画用紙に、畑で働いている絹枝の姿を描いている。しみじみと心に響く、奥の深い絵だった。

「これ、あたし？」

「うん。勝手にモデルにしちゃって、ごめん。とってもいい光景だったもんで」

「いい光景？ 川が？ あたしが？」

「うん。川もそうだけれど、君はもっと美しい」

「そんな……あたしは身体も大きく、大女って呼ばれているのに」

「君が大女なら、ぼくは小男だな。背が低くて、女の人たちにもてないんだ」

そうだった。見たところ、この二人は小男と大女で、ちんちくりんだった。

「君はここでいつも働いているの？」

「そう。あたしの母が、ここで投身自殺したという話なの……父は、戦争で亡くなったし……」

「戦死か……ぼくの父親と同じだ」

「……」

「でも、母親は生きている。元気で働いているよ。うちはお寺なんで、母が檀家や近所の子供たちを集めて、面倒をみている」

「それって、託児所？」

「うん、そういうことになるなあ。うちはずっと子供でいっぱい、騒々しいよ」

「子供が好き？」

「好きだよ。学校へ行く前の小さな子供たちは、託児所に集めなければ、大人は安心して働けないだろ」

「あたしも子供が好き……」言いかけて、絹枝は少し、とまどった。何かすごくよくできた偶然の出会いみたいだ。「あたしも、託児所で働きたいん」

「えっ？ そうなの？」

「そう。今、新潟の保母学校に通っているん。でも、オルガンが弾けねえで」

「オルガン？」

保母は、子供たちを遊ばせるために、ピアノとかオルガンとかを弾かなければならない。

「うちは貧乏で、オルガンもねえし、学校で勉強するだけではなかなか弾けねえで、教えてくれる人もいねえし……」

「そんならうちの母に教えてもらうといいよ」

「えっ？」

「うちの託児所にはオルガンもあるし、母が弾いている。頼めばきっと教えてくれるよ」

「まあ」

いいのだろうか？ こんなにトントン拍子に話が進んで、何もかもいいことづくめで、これでいいのだろうか？ 罰があたりそう。

青年は言った。「今度うちに来るといい。母も、親切な面倒見のいい人だし、君ときっと仲良しになれると思うよ。学校のない日に、来てごらん」

青年は毎日、この合流地点、川合いの地に、絵を描きに来る。僧侶なので、葬式のある日には来なかったが、そんなとき、絹枝はさびしくてならなかった。毎日、学校のない時間は、ここで働き、絵を描いてもらう。幸せいっぱいだった。

彼の絵、『耕作する娘』シリーズは、後に高価で有名な絵になる。彼は画家・三枝寿輔として有名になるのだ。と、それはまだ先のこと。ここにあったのは、画家の卵である若い僧侶と、働

き者の娘・絹枝との、邂逅であった。

絹枝は川を見つめる。ここで私のおっかさまが亡くなられたんだ……。野バラの花が咲いている。絹枝はその白い花を折ってみる。野バラ……おっかさまの魂のよう……おっかさま、私一人を残して、なんで亡くなられたの？……

「ここで私のおっかさまが亡くなったの」

「そう……」

「皆はおっかさまが自殺したって言ってるわ。でも、私には、おっかさまはきっと何かの事故で亡くなられたんだって、そう思えるの。小さい私一人残して自殺するなんて…そんなこと、考えたくない」

「……」

「ほら、この写真を見て」絹枝は、祖母・みちから貰った一枚の写真を見せる。

「これが、あたし……」

「あ、そう」彼も熱心に写真に見入る。

「幸せだったんだなあ。戦争さえなければよかった。ぼくの父親も戦死したし……僧侶が人を殺さなければならぬなんて、父もつらかっただろうと思うよ」

「そうね。戦争がなかったらね。あたし、いつも、思うの。おとっつあまがいなさったら、こんなときどうするか、あんなときどうするかって、いつも心の中のおとっつあまに聞いているん。身の振り方も、生活の仕方、種の撒き方も、収穫の仕方、これからの進路も、みな、聞いているん」

「そうだね。ぼくもそうだ。ぼくもいつも、いろんなことを、父に聞いているんだ」

もう戦争はなかった。

二人は明るい空を見上げる。春の、晴れた、青い空が広がっている。

もうこの空から、爆弾が落ちてくることはない。これはとても大きいことだ。人々に、泣いたり笑ったり、愛し合ったり憎みあったりできる、平穏な日常生活が戻って来たのだ。いろいろと問題は多いけれど、人々はその日その日の暮らしに埋没して、国に苦しめられることはもうない。幸せの青い鳥がここにある。

信濃川、中ノ口川、それに鷲の木大通川は、今も平和に流れている。そして橋は架け替えられて、信濃川大橋となっている。

「皆はおっかさまが自殺したって言っているわ。でも、私には、おっかさまはきっと何か